

自然な観点によるアイヌ語のいくつかの考察

富樫 慎

山形県西部の庄内地方では、チャペ（猫）やウライ（川漁の梁）などアイヌ語と共通する言葉を日常的に使っている。また、庄内の南東部に位置する羽黒町手向の蝦夷館（えぞだて）公園はかつて、アイヌのチャシ（城）があった場所と伝えられている。こうした実情を踏まえれば、この地で過去にアイヌ文化と交流がなかったと見るより、交流があったと見る方が自然である。どういう交流があったかは定かでないが、そうした自然な観点からアイヌ語と日本語にまつわるいくつかのことについて考えてみる。

●…：箒とは何か

箒（ハハキ、ホウキ）は、魔力を持つ道具として知られている。例えば、▽長つ尻の客を早く帰らせるまじないとして、ふすまに箒を逆さに立てかける▽未婚の女性は箒を跨いではいけない—といった風習の中に潜む魔力である。なぜ箒がこうした魔力を持っているのか。

民俗学で「箒神（ハハキガミ）」は、数多い神々の中で唯一、出産に立ち合う神ということになっている。また、古代の葬送には「箒持（ハハキモチ）」という役割の人がいたことが知られている。箒持の役割については、「葬儀場を清める役」と解釈する向きもあるが、この解釈では「他の儀式でも清め役は必要であろうに、なぜ葬儀に限るのか」といった疑問に答えるのは難しい。

また、出産と葬送という人生の両極に箒が登場するのはなぜなのか。同じ意味合いで登場するのか、それともまるで違う意味合いで登場するのも判然としない。いずれにしても、箒は単にごみや塵を掃く道具という以上に、深い意味合いを帯びていることは確かだ。

さて、アイヌ語で「掃く」はヌパ（*nupa*）と言う。関連語にヤイヌパ（*yaynupa*）、キモヌパ（*kimopupa*）がある。ヤイヌパの「ヤイ」は「自分自身」という意味で、ヤイヌパを直訳すれば「自分自身を掃く」になる。分かりにくいのが、これは「我に帰る」「目覚める」という意味だ。

一方、キモヌパの「キモ」は「*kim*（山）——（へ、へに）」に分解でき、キモヌパを直訳すれば「山に掃く」となる。これは「葬送」を意味する。アイヌの世界観では、すべての魂はカムイモシリ（神々の国）から使命を帯びてアイヌモシリ（人間界）に訪れ、使命を終えた魂は神々の国に帰る。魂を、伝令であるイナウ（幣）とともに送るのは人間の務めだ。イヨマンテ（それをそこに送る＝魂を神々の国に送る意）として知られる熊祭祀をはじめ、人間の葬送においても、魂を神々の国に帰すという意味合いは同じだ。人間の国と神々の国の接点は大きい山の頂にあるため、「山に掃く」が「葬送」を意味するのは容易に納得できる。

ここで、アイヌ語のヌパが持つ意味合いを掘り下げて考えると、「魂を」という目的語が隠れていることが分かる。キモヌパについては歴然としているが、ヤイヌパについては、もう少し説明が必要かもしれない。

日本語の「我に帰る」にも実は「魂が（我が肉体に）」という主語が潜んでいる。また、古くは寝ている間に夢を見

ることや、起きて夢想することが「魂があゝの世に行っている状態」と考えられていた。ヤイヌパは「自分自身（の魂）を掃く」、「どこかに行っていた魂を我が肉体に呼び戻す」という意味なのだ。

ヌパはごみや塵を掃くこととは直接関係ない深い意味を持っている。それは、魂を移動させること、しかも「あゝの世からこの世へ」（ヤイヌパ）、「この世からあゝの世へ」（キモヌパ）と、あゝの世とこの世の間を移動させる、あるいはそれを支援する行為なのだと分かる。掃くことと魂の移動との関係については定かではないが、汚れを清める行為に悪霊を退散させる働きを重ね合わせ、掃くことに靈魂一般を移動させる機能を見えるようになっていったのかもしれない。

こうしたアイヌ語の「掃く」ヌパが持つ象徴的な意味合いをそのまま日本文化に導入するとき、箒神や箒持、あるいは未婚の女性が箒をまたいだとはいけないといった風習の意味がよく解釈できる。

つまり、出産とは、魂が新たにこの世に訪れるシーンであり、葬送は逆に魂がこの世からあゝの世へと帰っていくシーンであり、それぞれ箒神や箒持は各行為を支援する存在としてそこにいる理由がある。また、長つ尻の客に対する呪術的なまじないはその人の魂の移動を促すもの、未婚の女性が箒をまたぐタブーは、箒の魔力によって魂が招来し身ごもる可能性を避けたため、と解釈できる。

こうしたアイヌ語の意味合いが、日本文化における風習を統一的にうまく説明できるのは偶然なのだろうか。

冒頭に述べた「交流」の仕方として、ここでは、アイヌ語の意味合いだけが日本文化の中に継承された形が想定される。

ちなみに、アイヌ語の掃く意味合いを踏まえるとき、ホウキという地名（鳥取県の伯耆、山形県酒田市飛島の法木）は、魂があゝの世とこの世を行き来するための発着基地的な意味合いを帯びている可能性もあるのではないかと思えてくる。

●…チャペとバッチ

庄内地方では猫を、時としてチャペと呼ぶ。しかし、外部から来た研究者が猫の絵を示し、「これを何と呼びますか」と質問すれば、当地の人は「ネゴ」と訛語で答えるに違いなく、表にはなかなか出てこない方言と言える。

それではチャペはどんなときに使われるのか。それは、猫がテーブル上の皿から魚をくわえていこうとするのを見たとき、「このチャペ」というふうに使われる。猫をのしる場合などに限定されて使われているのだ。

同様に、女性をのしる場合に使われるのが「バッチ」だ。女性は普通、オンナ、オナゴ、オナンコなどと呼ばれるが、本人がいないところでのしるような場合、「あのバッチ…」などと使う。チャペ同様に、使う側も「のしり言葉」「汚い言葉」という自覚があるため、外部の研究者が来ても表には出にくい。

アイヌ語でネコはチャペ(chape)、女性は「マチ(machi、mat、狭義では妻)」である。m音とb音が容易に変換することを考えれば、バッチもアイヌ語と共通する可能性を否定できないはずだ。

それではなぜ、ネゴやオナゴなどの一般的呼称があるにもかかわらず、アイヌ語と共通するチャペやバッチが「のしり言葉」として使われるのかを考えてみる。

私的な仮説として「異文化が交錯する現場では、より先天的に習得した言葉ほど、のしり言葉として凝縮しやすい」という考えを持っている。例えば、在日年数が長く、日本語をペラペラ話せるようになった米国人がいるとする。そうした人が普段は日本語を話していても、ことげんかとなると母国語の英語が飛び出すということは経験的に知られている。脳の記憶機能にも関係すると思われるが、先天的に習得した言葉は感情と直結しており、逆に後天的に習得した言葉は感情から離れていると考えられる。前者を「肉体的な言葉」、後者を「頭腦的な言葉」と言っているかもしれない。

ない。

こうした在日米国人のような異文化の交錯が大人数で、長期的に行われた場合、大勢においては日本語の体系でありながら、ののしり言葉（感情をストレートに表す言葉）が英語に由来する文化が形成されていく可能性が考えられるような気がする。これが仮説における「凝縮」の意味である。

以上のような文化的交錯が庄内地方で過去に、日本語―アイヌ語間であったとすると、アイヌ語に由来する言葉がののしり言葉の中に凝縮されて残り、ののしり言葉としてのみ使われる慣習が定着しても不思議ではないと思える。

ののしり言葉に限らず、言語を「肉体的な言葉―頭腦的な言葉」という軸上に配列して分類し、肉体的な言葉の中に先天性を探るという手法は、もつとサンプルを増やして検証してもよさそうな気がする。アイヌ語と日本語の中でも特に信仰に関する言葉（カムイ＝神など）で類似、あるいは共通するものが多いのも、信仰に関する言葉がより肉体的であるためと解釈できるのではないか。

チャベ、バッチに限って言えば、庄内地方において、かつてアイヌ語を先天的に習得し日本語を後天的に習得した集団がいた可能性を示すのではないか。

「交流」の在り方で言えば、このケースは、アイヌ語がそのまま日本語の体系の中に残った形だと言える。

●…命と死者の魂

日本語のイノチ（命）は、一般的に「生命の根源」と解釈される。一方、アイヌ語には「イノトゥ（ino tu）」という言葉があり、こちらは「死者の魂」を意味する。両者は近いようで違う、何とも微妙な関係だ。

しかし、日本語のイノチの意味合いを探っていくとき、必ずしも両者がニュアンスを異にするものではないと分かってくる。

我々が「生命の根源」という意味合いでイノチを意識するのはいつか。実は日常的に意識することはない。今そこに当たり前のものとしてあるとき、我々はそれを意識しないのだ。意識するのは例えば人が死んだときだ。「今の今までそこにあつたのに、今は失われてないもの」というふうを意識する。言葉の誕生の過程は「意識化」の過程であることを踏まえると、「生命の根源」という意味合いのイノチは、死のシーンに根差している可能性が高いのではないか。

繰り返すが、イノチは、ある人が死んだとき、失われたものとして最も強く意識される。ここで分かりやすいようにイノチを「A」と記号化した場合、人の死は「生者－A＝亡骸」という図式で示すことができる。これを「生者Ⅱ」という図式に置き換えると、その答えは「A＋亡骸」となり、人は死んでAと亡骸に分かれることを示す。我々は後者の図式の中でAを「死者の魂」と呼んでも何ら不都合を感じないはずだ。Aは、「生者から失われたもの」と生者に付随する視点で見れば「生命の根源」としてのイノチであり、「死ぬことで飛び出し亡骸とともにあるもの」と、死者に付随する視点で見れば「死者の魂」としてのイノトウになる。

つまり、死のシーンにおいて「生命の根源」と「死者の魂」は重なる。日本語のイノチとアイヌ語のイノトウは一見、違うようで、実は同じものを指しているように思えて仕方がない。

ちなみに「生者は魂と肉体に分かれる」という考え方は、アイヌにおいて重要だ。と言うのも例えば、イヨマンテは、神々が遣わして肉と毛皮を背負ってやってきた熊を、魂と肉体に分け（Ⅱ屠殺し）、肉と毛皮は人間がいただく一方、魂を丁重にもてなし神々の国に送ることだからだ。「魂と肉体を分ける」という行為なくしてこの祭りはない。

一方、日本文化には祭主を指す「ハフリ」という言葉がある。これと同源かは定かでないが、ハフル（放る）という言葉があり、それはホフル（葬る、屠殺する）と同源だとされる。ハフルには、「分ける」という意味もあることを踏

まえるとき、ハフル、ホフルは本来、魂と肉体を「分ける」行為を原義としていたのではないか。そうすれば、祭主を示すハフルはハフル（分ける）に由来する同源の言葉と考えることもできる。いずれにしても、魂と肉体が分かれることが、日本文化とアイヌ文化の接点の核心近くにあるように思えて仕方がない。

「交流」の在り方としてイノチとイノトゥのケースは、本来は一つの言葉だったが、日本語とアイヌ語で違う解釈（見方）で発展していったものと想定される。このように日本語とアイヌ語では一見ニュアンスが違っていながら、突き詰めていけば同じという言葉はほかに多いのではないか。かつて文化的交錯があつたとしても、ともに別々に発展したことを考えれば、違っていて当然であり、その歴史を一つひとつ掘り起こす作業が必要ないように思える。